

森の王 (イギリス)

昔^{むかし}むかし、ある山の中に小さな小屋^{こや}がありました。そこに、まずしい母親と三人の息子^{むすこ}が住^すんでいました。

ある冬の日のことです。外はひどい吹雪^{ふぶき}で、雪^{ゆき}が深く積^つもっていました。母親は一番上の息子に、

「森へ行ってたきぎを拾^{ひろ}って来ておくれ」といいました。上の息子はいやいやながら出かけていきました。

雪の森でたきぎを拾^{ひろ}っていると、木々のあいだに高い見はりの塔^{とう}が見えました。息子は、今までこの森でそんな塔を見たことがありませんでした。ふしんに思^{おも}って塔の周^{まわ}りを歩いてみました。塔には入口がなく、ただ、高い所^{ところ}に小さなまどがひとつあるだけでした。その塔のまどから、とつぜんとつもなく大きな頭のおじいさんが顔を出しました。おじいさんは、大きな目玉をぎよろぎよろさせていきました。

「お願い^{ねが}だから、泉^{いずみ}へ行って、水差^{みずさ}しに水をくんで来てくれないか」
上の息子は、

「水をくんで来てあげたら、お礼^{れい}に何をくれるんだ。ぎよる目のおじいちゃん」とききました。

「何もやる物^{もの}はない。わしはとてもびんぼうなんだ」
「それなら、自分でくむんだな」

息子はそういつてたきぎをかついで帰ろうとしました。すると、いきなりたきぎがはね上がって、息子をひどくぶちました。息子はおどろいて家に逃^にげ帰りました。そして、母親に、

「おかあさん、森におそろしい番人がいて、ぼくをなぐりつけたんだ。少しばかりのたきぎも持^もって帰れなかったよ」といいました。

つぎの日、母親は、二番目の息子に、
「森へ行ってたきぎを拾^{ひろ}って来ておくれ」といいました。息子はいやがりましたが、しかたなく出かけて行きました。

二番目の息子も、たきぎを拾っているうちに、高い塔の所にやって来ました。すると、あの頭の大きなおじいさんが顔を出して、目玉をぎよろぎよろさせていいました。

「お願いだから、泉へ行って、水差しに水をくんで来てくれないか」

「水をくんで来てあげたら、お札に何をくれるんだ。ぎよろ目のおじいちゃん」

「何もやる物はない。わしはとてもしんぼうなんだ」

「それなら、自分でくむんだな」

息子がたきぎをかついで帰ろうとすると、いきなりたきぎがはね上がり、息子をひどくぶちました。息子はおどろいて家に逃げ帰りました。

さて、末の息子は、ジャックという名前でした。ジャックは、いつもだんろの灰の中に寝転んでぼんやりしていたので、みんなからばかにされていました。つぎの日、ジャックは、だんろの灰の中から立ち上がると、

「さあ、こんどはぼくの番だぞ」といって、森へ出かけて行きました。

ジャックは、たきぎを拾っているうちに、高い塔の所にやって来ました。すると、頭の大きなおじいさんが顔を出して、目玉をぎよろぎよろさせていいました。

「お願いだから、泉へ行って、水差しに水をくんで来てくれないか」

ジャックはすぐに泉へ行って水をくんで来ました。すると、おじいさんは、まどから綱を下ろして、水差しを結び付けるようにいいました。ジャックがいわれたとおりにすると、おじいさんは水差しをまどに引き上げました。そのとたん、見はりの塔が消えました。ジャックがおどろいていると、後ろで、

「ジャック、ジャック」と呼ぶ声がありました。ふり向くと、足元の草むらにひとりの小人が立っていました。

「ジャック、わたしはこの森の王だ。おまえはわたしにかかっていた魔法をといて自由にしてくれた」

小人は、そういうと、指輪をひとつジャックにくれました。

「お札にこの指輪をあげよう。願い事があったら、指輪をこするんだ。そうすれば、どんな願いでもかならずかなうよ」

ジャックはお札をいって、指輪をポケットにしまいました。それから、たきぎを拾って

家に帰りました。

さて、森の近くに大きなお城しろがありました。お城のそばに深いほら穴あながあつて、ほら穴のおくに黄金のつまつたふくろが置いてありました。ところが、ほら穴の入り口には火がぼうぼう燃もえている炉ろがあつて、だれもふくろを取りに入ることができませんでした。王さまは、ふくろを取つて来た者ものを末すえの娘むすめと結婚けっこんさせるとおふれを出していました。

ある日、一番上の息子が、

「おかあさん、ぼくは王さまのお姫ひめさまと結婚します」といつて出かけて行きました。けれども、どうしても火を通りぬけることができずに帰つて来ました。

しばらくすると、二番目の息子が出かけて行きました。けれどもやっぱり火を通りぬけることはできませんでした。すると、ジャックが、

「さあ、こんどはぼくの番だぞ」といいました。母親は、

「ばかなことをするんじゃない」といつて止めましたが、ジャックはかまわず出かけて行きました。

ほら穴の周りには、おおぜいの人たちが集あつまっていました。みんなは、ジャックのことをばかにしていたので、気にもとめませんでした。ジャックは、こっそりポケットから指輪を出してこすりました。そして、まっすぐ火の中を通りぬけて、黄金のふくろを持って出て来ました。みんなは、びっくりしました。ジャックはさつさと家に帰ると、黄金のふくろを、ジャガイモのふくろみたいに小屋のすみに放ほうり投なげておきました。

王さまは、お姫さまたちに、ふくろを持って行った若者わかもののことをたずねてみましたが、だれも知りませんでした。そこで家来けらいたちをやつて国じゆうさがさせましたが、見つかることができませんでした。

あるとき、王さまは、山の中に小さな小屋があるのを聞きつけ、だれが住んでいるのか家来けらいに調しらべに行かせました。戸をたたくと、母親が出て来て、何の用かとたずねました。

「ここには、だれが住んでいるんだね」

「わたしと、三人の息子ですよ」

「その息子たちに会わせてくれないか」

家来は、ジャックを一目見て、ふくろを持って行った若者だと分かりました。家来はお城にとつて返し、王さまに報告しました。王さまは、すぐにむかえの馬車をさし向けました。

馬車が出て来ると、ジャックは笑って、

「ぼくなんか、何の用があるんだい」とききました。家来は、

「王さまがおまえに会いたがっているのだ」といって、ジャックを馬車に乗せました。

王さまは、ジャックを一目見て、あの若者だと分かりました。お姫さまたちはジャックのまじしい身なりを見てばかにして笑いましたが、王さまはジャックをすわらせておいしいお酒をごちそうしました。ジャックは、お酒を飲みながら、ポケットの中で指輪をこすりました。

(末のお姫さまが、ぼくといっしょに散歩をしてくれますように)

しばらくしてジャックが家に帰ろうとすると、末のお姫さまが、

「近道を教えてあげましょう」といって、付いて来ました。ふたりは楽しくおしゃべりしながら歩いて行きました。

ジャックは、お姫さまと別れて家に帰ると、母親に、

「おかあさん、ぼくは末のお姫さまと散歩をしたよ」といいました。

「なんだって。おまえなんか、りっぱなお姫さまと何の関わりがあるっていうのさ」

「ほんとうだよ。今にぼくはお姫さまをこの小屋に連れて来るよ」

ジャックは、森へ出かけて行って、指輪をこすりました。

「ぼくは、森の王に会いたい」

その言葉が終わるか終わらないうちに、小人があらわれました。

「ジャック、おまえは何がほしいのかね」

「末のお姫さまと結婚したいんです」

森の王は、

「いいとも、ほかにほしいものはないかな」とたずねました。ジャックは、

「ぼくは、この森のあなたの近くに、大きなりっぱな館を持ちたいんです」といいました。そのとたん、目の前に大きな館があらわれました。

やがて、お姫さまが二頭立ての馬車に乗って小屋にやって来ました。母親は、びっくりぎょうてんしました。ジャックはお姫さまを森の館に連れて行き、ふたりはそこで結婚しました。黄金のふくろは、母親とふたりの兄さんのために小屋に置いて行きました。

それからずっと、ジャックとお姫さまは、幸せしあわに暮くらしました。

* わたしは、このうそっぱちの話をしたお礼に、大きなプリンをもらったよ。

* わたしは、くもらったよ。 これで昔話はおしまいいみという意味いみの決まり文句もんく。

原話：『ジプシーの民話―ウエルズ地方』ジョン・サン普森著／
庄司浅水訳／岩崎美術社

再話：村上郁

